

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520025

研究課題名（和文）集合的記憶を媒介とした世代間コミュニケーションに関する現象学的研究

研究課題名（英文）Phenomenological Research on the Cross-generational Communication through the Collective Memory

研究代表者

神谷 英二（KAMIYA EIJI）

福岡県立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：40316162

研究代表者の専門分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：現象学、記憶、習慣、情感性、集合的記憶、世代性、世代間コミュニケーション

1. 研究計画の概要

「記憶」に関する現象学、解釈学およびベルクソン哲学による理論をもとに、「集合的記憶」について現象学的方法によって記述し、その構造を理論的に明らかにする。

さらにその研究成果を理論的基礎として、「世代性」に関する研究を行い、世代の連鎖と世代間コミュニケーションにおける「集合的記憶」の役割をアンソニー・J・スタインボックにより提示された世代発生的現象学の方法により、理論的に明らかにし、「世代間倫理」と「世代間衡平性」に関する研究に理論的基礎を与えることをめざす。

2. 研究の進捗状況

(1)2007年度

ミシェル・アンリの記憶論を中心に、個別の自我の記憶について研究を進めた。その結果、人間の身体は「直接的知」であり、これこそが記憶であることが明らかになった。そして、「私の身体が存在そのもの」である習慣が記憶の根拠であり、私たちの身体の根源的な記憶こそが習慣である。さらに、記憶の原理は、＜原-身体＞であり、表象的記憶も＜原-身体＞に基づくことが解明された。

さらに、「集合的記憶」と「世代間コミュニケーション」に関する哲学的理論の構築には、ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』における「記憶」、「集団の夢」、「目覚め」などの概念について探究することが不可欠であるとの新たな研究上の見通しを得た。

(2)2008年度

アンリの記憶論を中心に、「集合的記憶」

研究を開始した。ここでの問いは、「集合的記憶の超越論的根拠は何か」であり、4点が解明された。①情感性は、身体の身体性である。②記憶の根拠は、「私の身体が存在そのもの」である習慣である。③超越論的情感性は、自我の＜基底＞であると同時に他者の生と共同体の＜基底＞でもある。④記憶の根拠は超越論的情感性であり、個別の自我は超越論的情感性から発生する。

さらにベンヤミン『パサージュ論』での記憶論研究を行った。ここでの問いは、「遊歩者は集団の夢からいかにして目覚めるのか」である。遊歩者には「弁証法的形象」となりうる商品を通路とし、「認識が可能となる今」である覚醒の瞬間が到来しうる。そして、これは「歴史学の新たな弁証法的方法」となる想起であり、遊歩者は「歴史の主体」になりうるということが分かった。

(3)2009年度

ベンヤミン『言語一般および人間の言語について』を分析対象にして、「固有名と記憶」研究を開始した。ここでの問いは、「固有名は集合的記憶にいかなる影響を与えるか」である。研究の結果、固有名としての人間の名は、神の言語と人間の言語の中間的審級であるとともに、永続的な創造の源泉であることが明らかになった。また、翻訳とは、神が人間に委託した通りに、人間が名なきものを名づけることであることが解明された。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由)

当初の研究計画をほぼ予定通り遂行している。

それに付け加えて、当初の研究計画策定の段階では明らかでなかった、当該研究課題にとってのベンヤミンによる記憶研究の重要性を発見し、『パサージュ論』と固有名に焦点をあてた記憶論構築を進めている。

なお、当初の研究計画では3年目に予定していたベルギー・ルーヴアン大学・フッサル文庫での資料収集は、本研究プロジェクトの開始後に、当該資料が公刊されたため、計画を変更し中止した。

4. 今後の研究の推進方策

(1)2010年度の「集合的記憶」に関する研究においては、引き続き、「土地の名」の記憶とそれに触発されて形成される「集合的記憶」の関係を解明することが主要な課題となる。

これまでの研究成果を「集合的記憶」の解明につなげるためには、固有名に関する具体的経験を分析することが必要であり、ベンヤミンのテキスト（『ベルリン年代記』、『1900年頃のベルリンの幼年時代』）を対象に地名（街路名）と人名に関わる経験の分析を重点的に行う。

また、上述のテキスト以外では、『パサージュ論』をはじめとする、ベンヤミンの記憶論に関わる著作、アルフレッド・シュッツの帰郷者論、モーリス・アルブヴァクスの研究、および、ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』が重要な研究対象となる。

(2)これまで3年間の研究成果を踏まえ、当該研究課題に関する理論的全体像を明らかにするために、2010年度末に、最終報告書の作成・公表を予定している。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 神谷英二、固有名と記憶(1)、福岡県立大学人間社会学部紀要、第18巻第2号、13-25、2010、査読無
- ② 神谷英二、遊歩者・記憶・集団の夢—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために—、福岡県立大学人間社会学部紀要、第17巻第2号、67-79、2009、査読無

- ③ 神谷英二、情感性と記憶—アンリ現象学による試論—(2)、福岡県立大学人間社会学部紀要、第16巻第2号、1-14、2008、査読無

[学会発表] (計2件)

- ① 神谷英二、直面する課題から逃げず、小銭で払い続けるために—私の哲学的戦略メモ—、日本現象学・社会科学会第25回大会(シンポジウム2「現象学と社会科学の接点をもとめて」)、2008年12月7日、武蔵大学
- ② 神谷英二、情感性・習慣・記憶、哲学会第47回研究発表大会、2008年10月25日、東京大学